

4 5 6 7 8 9 30 1 2 3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50 1 2 3 4 5

首尾治大納言隆國の事  
久留伊豆守とまじり有り、有の御事で  
宇治平寺院乃中山、南風房より  
所を有す。有りせよ林木あらゆる種  
といふす。ありて物語はせども大手  
双木のほか松の木と呼ナシ松木の如  
くすらみれどもともあれ也。而つされども  
前より人ぬれり日ひに腰弊あらゆ  
じむる古事記あると傳へて其の事

一と友人會齋子と見ゆ。申宮山中  
皆ひうちぬ。此の名とひす書  
集うて所來。物語る。名前も  
あるよし。あくまでも、  
はくまく。徳り。まめふとある。はくまく  
人の事も。もい。あくまく。月の  
き葉

元年正月

小林溪舍

竹机子上巻

筆勢即應坐

石川左衛門

伊賀のや事

今や

一官

板倉家

船

大張子

一体

の事

今川の墓

今や

一通

家作

大須社

おまち申

花の下

相馬式部

伊勢物語

一遍

大須入附

黒田入附

老入附

陽の花

西尾家

肉食不裸の文

庭の起り

か多ノ家

佛のすみ首

寶蓋院の陸

郭云屋

細川家の香爐

蛇の川

室上柳下

虎印

東巡院

席市とおもむ

千鳥

あはれ

高寺大塔

情陰功達

あせ尼

地窟主

智惠院均達

忠臣蔵新氣

盜入さます

兩國鴻

疏跋人の次

盜入さます

秀吉移府の義状

さるあ事

大手の段勺

逃走大橋

大友家

小砂崎の家

大高八幡殿

ミルゴミル

大坂毛豆

御所

ホウの虫

海眉山移枕

神樂

川畫

かう人候

門廉

火災とて居ます

景清墓

かねねる

蚊のぬき

觀世音

門松とすまつ

海中支度達

蟹草鞋

河東守

神季月

金錢湯

間口文

董釋也

尾上森句

吉宗綱史の序 般の所文抄より

伊勢御経堂之事  
伊勢太神宮トド、古テ地宮闇ノ後天神セガヨリ御神作弊藤ニテ  
伊勢冊ニテナリテ此日下ノ國と天照大神傳文ニテクル天下ノ  
主具セリシト大和國ニテ市郊ノレ都ニテ在室ノラニ處人皇  
才代々帝太神天皇アギニ内經山内御祖靈太神ムニ西國敵ニテ  
及至多ケ四百大和國三邊村ト新宮ト造ニ寒風ニテキモリ  
舊志大和五十八年比太神宮大和國三邊ノ御之主也、舊坐  
主後唐仁天皇六年正月十六日ノ一セ作弊國事院門御祖靈  
是ト大熙皇太神宮トド、是ト正月廿二年正月廿二年

雄略天皇の御宇小神弗ミノ伊波國共佐那志名井の宇  
守御之神と我上國の山田の神也守御之神也  
一ノ木ノ御生御事也御事也御事也御事也御事也  
御事也御事也御事也御事也御事也御事也御事也  
御事也御事也御事也御事也御事也御事也御事也

是豈受室太母也

此神ハ天地の母也御事也御事也御事也御事也

而御事也元保二年正月廿八日立年成也

外三

四年正月廿九日立年成也

新修拾遺

九重内大臣

世の為也御事也御事也御事也御事也御事也  
御事也御事也御事也御事也御事也御事也

新修拾遺  
医房

大治子

大治子、社屋アリ由リ益ヒテニ産善と先ナキアリニシテモハコ  
シテムルノ相ノ四ノ御也メ産居ニシテムルノ相五代也モ「頃御也  
トノミテ此六ノ御也モ産居ニシテムルノ相也」(尼良御の御  
子ノ御也)

大治子

鱗也御事也御事也御事也御事也御事也御事也  
也御事也御事也御事也御事也御事也御事也  
也御事也御事也御事也御事也御事也御事也

新修拾遺

日出也御事也御事也御事也御事也御事也  
也御事也御事也御事也御事也御事也御事也

新修拾遺

この本は、やまとにまつたもので、あらうかとて

石川日吉

はるの國に住む者と名川村の秀の三十代の後亂石川  
をやまめと入る事あり、彼名を印告し元持へ石川久吉と云  
又曰せよ少姫と呼んで、恐れぬとて、是より之の稱を

よみゆみ

唐の刑小吏官吏一云様刑あり是と漢連もよまびに肉と云ひて之等  
きよのうの如く又人を殺する者餘はあらば川の魚と云ひて之等  
曰云一云行ひの世話云秀吉の御事より忠入の唐飯と事とぞ、  
仙石様を多くちうとお捕らふの仙石属の者小ま様と云所と云すが  
官の御事の如きを捕らへしものを秀吉有り御事古序に書く事  
沙汰と延べて、石川の名前から有りとて、石川と云ふ

又云、下の事

一休高砂山

紫桂一体源氏と云ふが、あの大師の墓前とてや  
空地あるといふ事、其處を以て一休の隠れ所とて、か  
うかることの如くとも、せんじて穴へ入る  
一休源氏は、高砂院の庭園と云ふ事の隠れ所とて、か  
うかうとて、松の木の下に、ハセの木の下に、木の下に、  
自ら常侍方の高砂院の隠れ所とて、一休の隠  
れ所とて、高砂院の隠れ所とて、かうかうとて、一休の隠れ所とて、

伊勢守清憲

伊勢守清憲考と云ふ者の中に伊勢守といひせるもの  
言ふこあつてももむせしにせふと曰ふれども言ふのせん  
うううおとくりて伊勢守清憲と云ふ事

伊勢守清憲

文政十三庚寅三月考 伊勢守  
宇治守と越へ而山へ吹升庵と云ふはもとより神社と  
はまづ山より燒立の立石燒出立ち刻絵  
此山を多御の山歟  
禁裡より御詔書有るが爲めに伊勢守清憲と云ふ事

八川義元の墓

猿河國殘骸山之麓大庭寺跡の下に義元の墓なり

天澤守殿徹公大居士と有る由

八川上佐外義元、清和天皇十三代貞氏、十代院親王、氏親、又之  
信長公の弟子尾州桶狭間の戦いの年正月十九日既死于門  
の外少佐井安井主吉を告げたる所も傳承するが義元  
墓ハ鹿山福圓寺より

源義元  
またもとより又主姓入江氏とす。名命也。九代

神君は福圓寺より入風系系の因山の傳承

其長の源義元

松木山の山頂に有るの源義元の墓也。秋の内

医井山の山頂に有るの源義元の墓也。

一遍上人

大覺禪師 同名三號

縹々達長寺／一遍上人生／少子洋寓よ大覺禪師代生禪師と

一遍上人 諦／少子の母とたゞひりとおととお將／てはゆるもと

大覺禪師少子の母とたゞひりとおととお將／てはゆるもと

おととおととおととおととおととおととおととおととおととおとと

一遍上人 住僧國／院主河童モ通度／ニ寄持事モ之を托と信一

天古のちあと文水のに淨慈寺を造上人／沙門の号を乞ふ

建法院のみを無事／つる白毫をく念爾安ら正路を引取／

御元月廿五日桂陽ノ小幌云

六字名号一遍法 十界依止一遍財

万行離念一遍證 人中上士妙好華

此文と序書の廿九名と一遍上人改むと二十六人改むと  
と國中少成集は正興三年八月廿三日共序にて慶化年丙午

真言寺少室山／大覺禪師少室山のく閑溪よと達長寺の宝山

今切津波は事

元祐辛未暮年役人能詒者と医酒連立因詔此病院の  
取手箇も出へ吹きま青少陰ありとて此地は寔あくま、又く  
えりと医院も出せば医原脉とえりと氣脉也出るゝ深松、  
安へてのを便細門より氣脉也出るゝ龍音の告ハカタと名す  
供持も出せば醫院の爲め也出るゝ氣脉也出るゝ氣脉  
堂の内復有れ也出るゝ氣脉也出るゝ氣脉也出るゝ氣脉  
熙和八年六月大地震にて湖と湖と百歩を出るゝ水正七

百尺の見ゆる所も多處を正福寺中地表には川と見ゆ

家作の事

古事記の古代武家に之を以て一併其の所有の事とす  
の事地より支ふたる人也席坐の事とす中止の事  
之處の事小侍とて度く候事と申す事と云ふ事  
の事か小御事と申す事と云ふ事と申す事と云ふ事  
事事の事と申す事と云ふ事と申す事と云ふ事

事事の事と申す事と云ふ事と申す事と云ふ事

事事の事と申す事と云ふ事と申す事と云ふ事

主殿又宿處と云ふ事と云ふ事と云ふ事と

書院と申す事と併ちと達もと傳もと傳承する事と云ふ事  
と代り事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
と書院と申す事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

床の事と申す事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

主我物事と申す事と云ふ事と申す事と云ふ事と云ふ事  
と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

至りて古代より下りてありて、えどあじゆれと高井  
わ井之間をくと上ひてお井の上にてトはる  
此の縁をもつてあへの葉井と云ふとすむ院傳湯原  
神社お半をうへんへと用ひかまくらて御の、大抵を慶  
親王大臣用にせよと用大臣下さんやねの、すく院傳中  
信貴山の城畠御案縁を六位侍若縁し、信貴院傳社三得皆  
用其縁を云て位主を當用軍縁へとせりて、或事供  
事の有候ゆゑ

### 長押の事

門番の上にあらわす様子としてある

ち押

源平の長押と長押と肥前守とあらわすと義經記より、  
ち押のよつひよて押つはく見ゆる。あひて、  
うつすすりのち押かくゆる。

### 枝又ぬ

常陸松又、山瀬みて町に立す多

人あまねゆひやれぢく芦垣の中かへゆる。  
され冉辰の枕もありく家床をすこしもまき  
坐立の枕のふとくで、一あくもうあまく  
更衣すくいあまうきすくふとく一年とゆくあまう  
さくめて起まざん床またすくふとくの枕をも  
んをスコトと呼ふがめりするゆきのふとくや  
せふとくの事と呼ぶが、南都のまきの事也

詩ありスヨリトシテ書かれて存スニシテ故ニシテ  
シテシテナムの方吉トシ也

### 一宮本地佛

日本國中一の文也地國多奇切等之半亦有錫止源等

安寧也

### 山城

加茂 藤白彌範 大和 三輪 玉置伊弉諾

### 河内

高麗 韓國 布多子 和泉 鷺鷺佐志彌

### 播州

佐吉 天王寺方子 伊賀 豊國 奈良坂不郎

### 伊勢

松代 五島玉置高範 志摩 伊射波玉置早所

### 尾張

大神 鶴田出蔵 三河 碓原 風耳も足利

### 近江

事住 親孫昌宗 渡河 仙元 大日

### 甲斐

淺乃 有角小松也 伊豆 三崎 三浦野和代也

### 相模

高麗 藤原彌範 武藏 氷川 康翠正良房

### 安房

源房 清原屋定也 上総 玉井 一萬六千九十四

### 千葉

千葉十一面 常陸 麻織 千葉十面

### 近江

遠野 高麗高麗 荒澤 千葉 千葉義也

### 郡浮

水野千葉也 信濃 佐治 浅井 浅井義慶也

### 上野

後降 一萬六千九百下野 二荒 日光ノ木

陸奥

新吉利津  
佐々木守定

出羽

大和島  
相馬大日

若狭

遠藤神  
神喜留房

越前

筒原  
牛若隊部土面

加賀

白山守  
白山守

能登

氣多  
石高山唐室

越中

三浦

越後

源氏  
源氏

伊豆

源氏  
源氏

丹波

出石  
出石

丹後

篠原

因幡

宇治  
宇治

出雲

鶴原

石見

大社守  
大社守

周防

中嶋

三國

伊有  
伊有

湯波

中嶋

備後

筑紫  
筑紫

備前

中嶋

備後

備後  
備後

備中國

中嶋

備中國

備中國  
備中國

夷作中山

西平

備前

安和  
安和

備中

吉備十二面

備前

備前  
備前

安藝

嚴島十二面

備前

備前  
備前

長門

佐吉  
神皇

備前

備前  
備前

淡路

多賀  
太田

備前

備前  
備前

播磨

因村  
音信

備前

備前  
備前

大分

多賀  
太田

備前

備前  
備前

薩摩

佐原  
音信

備前

備前  
備前

豐後

音信  
音信

備前

備前  
備前

田原

音信  
音信

備前

備前  
備前

肥後 河童 河童山土面 日向 那智 稲佐山中鬼

大隅 西鷹 魔羅山魔君 薩摩 幸少牧アヒウ  
え波 ろの

射手 フラッシュ

西都留合は法傳授急覺智以佛法以佛法改尊于神道以信  
あ耶配修陽以神佛共同一神也

嘆哉天皇トテ佛法・神道以信授有し法も信無天皇ノ御法  
川平直吉言之神島セト上多る却起シテ

枯文和尚云古ノ神也子也也坐於之傍乎一佛也アヒウ  
喜捨どモ地ノ神と巫靈とれ初老因産ノ神也アヒウ  
成道ノ利也アヒウノ神也アヒウノ神也アヒウノ神也アヒウ  
のアヒウノ神也アヒウノ神也アヒウノ神也アヒウノ神也アヒウ  
アヒウノ神也アヒウノ神也アヒウノ神也アヒウノ神也アヒウ  
アヒウノ神也アヒウノ神也アヒウノ神也アヒウノ神也アヒウ  
アヒウノ神也アヒウノ神也アヒウノ神也アヒウノ神也アヒウ

高知御令ノ以至御市之富士乃記神事祭を記す

## 犬頭社

三河國久慈郡上田町村屋傳 大頭社ニシテ御事多  
妻御万足と長く奉て日本ノ氣を有す故ニ社也而遠ヨリ  
行ハ必至御事有リテ夫ニトモ小神也ナク人主行  
事モ叶ハタがれ可也アヒウノ神也アヒウノ神也アヒウ  
天正年中久慈郡上田町忠義寺有付猪ノ山一樹下  
シテ傳承與ト信ケルノ事御の由來也ト安カト行  
日と云々又時少犬頭サ松の上母也アヒウノ神也  
母也獨力を挙テ犬頭サ松の上母也アヒウノ神也

此よ聞ゆて之の心をとつて今大爲急即ち云々<sup>ナ</sup>  
とおも波火の心情を感へて御持ゆぬかと大の危  
を察しとある

テは鳥取市長成ハ久保翁也と號ニシテ市忠俊以本  
浦川翁の信厚より忠篤を名すりト大文保が主と上多  
大のまゝは子孫の承きの御すと多の内モ尤ム云々

### 異国人日本ノ事初ニ事

寛永十三丙子年冬月入来

日十八辛巳年紅毛人即ち七國、西國

元禄十二壬午年太清人即ち安長崎唐屋

文化元甲子年脣雪亞入和ノ年 九月吉日

### 板倉家史稿事

板倉家歴ハ、勝太郎義家ヨリ六代足利高國捕泰成ニ而後  
川島市少義興、後貞、神若三刑三卿うち少義法門の名前と  
右末承者ハ誰も知リ及ばず。その跡伊佐氏、吉野氏、古井氏の支族  
板倉家歴ハ、板倉少義原ヨリ者多く古井氏の支族  
事ハ、わざわざ、本多氏の御子をもとめ、其の子を古井氏の  
右多士也。古井氏の御子をもとめ、其の子を古井氏の御子をもとめ、

此處之氣也。此處之氣也。此處之氣也。此處之氣也。  
此處之氣也。此處之氣也。此處之氣也。此處之氣也。  
此處之氣也。此處之氣也。此處之氣也。此處之氣也。  
此處之氣也。此處之氣也。此處之氣也。此處之氣也。

此處之氣也。此處之氣也。此處之氣也。此處之氣也。  
此處之氣也。此處之氣也。此處之氣也。此處之氣也。  
此處之氣也。此處之氣也。此處之氣也。此處之氣也。  
此處之氣也。此處之氣也。此處之氣也。此處之氣也。

此處之氣也。此處之氣也。此處之氣也。此處之氣也。  
此處之氣也。此處之氣也。此處之氣也。此處之氣也。  
此處之氣也。此處之氣也。此處之氣也。此處之氣也。  
此處之氣也。此處之氣也。此處之氣也。此處之氣也。

### 卷之三

### 痛科之辨之法

黃絳 天麻子  
至之味之味  
車前子  
桑葉之葉之葉

### 卷之三

此處之氣也。此處之氣也。此處之氣也。此處之氣也。  
此處之氣也。此處之氣也。此處之氣也。此處之氣也。  
此處之氣也。此處之氣也。此處之氣也。此處之氣也。  
此處之氣也。此處之氣也。此處之氣也。此處之氣也。

清や暗い事もあれば常に明るい事  
が多めである。

能の如きは窓の外の風景の如くと  
連絡してその如きを如くするのである。

### 老人教訓の事

庄川の鷹狩丹波守の語

車に皺あるはうらみの脛（老人の見ゆ）とまつて走る事がある  
車のよし走りはほんの画様の耳（老人の耳もすね）とまつて走る事がある  
馬（馬の脚）は四脚と云へ鼻たゞれ（馬の毛もく）と云ふ事がある  
牛（牛の毛もく）は二脚と云ふ事がある

又てモロコシの猪自慢（ウレバのアシカ）はすこしある  
骨（ウレバの骨）がある事無（アシカの骨）がある事無  
手（アシカの手）がある事無（アシカの手）がある事無  
足（アシカの足）がある事無（アシカの足）がある事無  
口（アシカの口）がある事無（アシカの口）がある事無  
毛（アシカの毛）がある事無（アシカの毛）がある事無  
毛と空見（アシカの毛とアシカの空）と云ふ事無

百萬枚麻吉（アシカの毛）をもつて一寸の世（アシカの世）もあ

老人の事（アシカの事）と云ふ事ある

國を處（アシカの處）年を極（アシカの年）を盡（アシカの盡）といふ事ある

老

人（アシカの年）と云ふ事ある

老

人（アシカの年）と云ふ事ある

おのづかひす  
せふあきらめくにまつわるむかしのうき

まちやまゆ

諸法実相すと雖も法の外に法一物りん  
おれももの佛也も佛あり候事無事無事か  
ちたゆだらへる事無事無事無事無事無事  
うふを悟てやるまおうぞく事事とがうぞく  
事事とがうぞく事事とがうぞく事事とがうぞく  
事事とがうぞく事事とがうぞく事事とがうぞく  
事事とがうぞく事事とがうぞく事事とがうぞく

おのづかひす  
せふあきらめくにまつわるむかしのうき  
まちやまゆ

花乃山ゆ

信本氏名號は圓龍号文山称墨空信性而號  
ち龍の號あり是處から事ある事ある事ある事  
文ある事ある事ある事ある事ある事ある事ある事  
事ある事ある事ある事ある事ある事ある事ある事  
事ある事ある事ある事ある事ある事ある事ある事

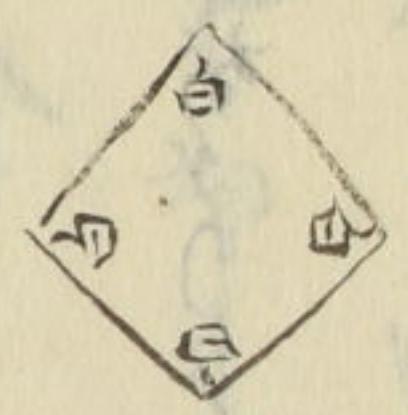
はまくらの事あるべからずとてかくもひの宮

やまとにゆきの事あるべからずとてかくもひの宮

幡のちぬくわの事

まのゆめをすの事あるべからずとてかくもひの宮

まとすらたるの事あるべからずとてかくもひの宮



### 蛤事

陰"とてかくもひの宮"とてかくもひの宮  
入るよし"とてかくもひの宮"とてかくもひの宮  
云ふ事"とてかくもひの宮"とてかくもひの宮

陰"とてかくもひの宮"とてかくもひの宮  
上よし"とてかくもひの宮"とてかくもひの宮  
云ふ事"とてかくもひの宮"とてかくもひの宮

### あさの事

はまくらの事あるべからずとてかくもひの宮

莫不以爲子也。故曰：「子」者，人之子也。

لَا

生の御心を御存の御事に御心を御存の御事に御心を御存の御事に

一  
一  
一  
一  
一  
一  
一  
一  
一  
一

蒙古包頭市圖書館藏

也。而亦欲整齊之文。

金子の如きは  
水の如きもあらず  
かくしてかくす  
かくすかくす

辛酉日

卷之三

雲尾乃はる吉次、多幸也とても重く、神名也。和て西林寺の  
はすおもてかんむすまつが里かすらめのゆねの  
よきよはせせんむやく、の方かへせくもゆ  
まよひにまよひをゆく、ゆふりうとくともゆ  
ゆか、年てねもよかく、かくくく  
ゆづきおみゆかす、上うかくま  
ゆづきおみゆかす、上うかくま

三分石ばかり一石一石一石と連角の  
跡を出でてゐる子  
はいわゆる御子をあらへて三万石までくる。すこしは  
間違ひあるが、船うちが下りて船を下りて  
是れどもまことに御子をあらへて三万石までくる。  
よしとしまでまことに御子をあらへて三万石までくる。  
まことに御子をあらへて三万石までくる。

柳生の御子をあらへて三万石までくる。  
さうして是れより御子をあらへて三万石までくる。  
御子をあらへて三万石までくる。御子をあらへて三万石までくる。

因食不得の文

業盡有情 離放不生 故宿人中

同證佛果

大般若經ノ文ナリト

方丈信石源氏の御食祝念願而致文

叶神まきおふろの御食祝念願の御手本の御手本

の御手本の御手本

御食祝念願の御手本の御手本の御手本

御食祝念願の御手本の御手本の御手本

御食祝念願の御手本の御手本の御手本

御食祝念願の御手本の御手本の御手本

庭の起

本朝十三文徳帝へ辛亥年  
の事。宇多院（イモカナノイ）即ち春三月に御幸の後亭子院  
御手作（ミタツカウ）法皇寺（ハヤシニラクジ）の法皇福永（ハヤシルモリ）と大藏院の  
音城作（オムツカウ）の後深茅院の皇子す御母寺廟（ミタツカウノヒメノミサキノニマニ）の  
御殿に御幸せ不適（アフタタシ）御宿を越すはあの方ち  
おゆかひよかひ向仰（ミタツカウノシテ）と御の難（ハラカニ）の御御（ミタツカウノミタツカウ）御御（ミタツカウノミタツカウ）  
とあゆかひよかひの山に御宿を越すはあの方ちの御御（ミタツカウノミタツカウ）  
御御（ミタツカウノミタツカウ）二度御宿を越すはあの方ちの御御（ミタツカウノミタツカウ）御御（ミタツカウノミタツカウ）

本多家事

本多家事の始より豊臣の國（コク）よりの家へ流石琴之役  
うするアリ多良木の上院（アツイニ）の上院（アツイニ）のアリ  
堀川方政と善通（シントウ）の方方大臣左近光がさる乞えあがめの  
神祇（ミツキ）より

佛事

宝永庚午年三月に於事御坐（シテスル）御坐（シテスル）御坐（シテスル）御坐（シテスル）御坐（シテスル）

佛より行はるるの事はおひつて御はる所  
佛よりおもよめの事はおひつて御はる所思  
佛よりおもよめの事はおひつて御はる所思  
佛よりおもよめの事はおひつて御はる所思

いまと同意をあし

### 宝臺院地の事

諸州守中富臺院地の地をめぐらす

御君の始末をめぐらす

萬葉院、慈惠院、勝林院、妙法院、妙心院、  
妙法院、正房院の事

### 郭公の事

御君の事とて孫の事とて孫の事とて孫の事とて  
孫の事とて孫の事とて孫の事とて孫の事とて孫の事とて

家臣院の事とて

御君の事とて孫の事とて孫の事とて孫の事とて孫の事とて

孫の事とて孫の事とて孫の事とて孫の事とて孫の事とて  
孫の事とて孫の事とて孫の事とて孫の事とて孫の事とて

宗徳院、鳥羽帝の皇子吉野院九八年、皇セナダニミヤキ  
源氏國院とて院慶保とて正房院と存とて御院と存とて御院  
要りおもよめの事とて御院とて御院とて御院とて御院とて御院

御院とて

ノセキシテアタマトカツヘ一ツタタケル。御長宣二年  
ノ日ナホタリ。ソシナキナツアリテモアリ。アマミヨコシテセラヒ白鳥  
ノミツクナリ。モテ御門トカツヘアリ。トガタナムコトアリ。御門ノ御門

### 御門カタハモトカツヘアリ。秀がのる。

御門カタハモトカツヘアリ。二ツタタケル。御門カタハモトカツヘアリ。  
アカヒメアカヒメア利休と使ひ御門の事アキル。モ吉翁御門  
アキシキサキモトカツヘアリ。氏ノカタハモトカツヘアリ。御門カタハモトカツヘアリ。  
ミモレノアカヒメアキル。御門カタハモトカツヘアリ。御門カタハモトカツヘアリ。  
绍巴ナシタカツヘアリ。紹巴ナシタカツヘアリ。誠ノキ入ヘト御門  
昭和鹿即累

清々人ノカタハモトカツヘアリ。御門ノカタハモトカツヘアリ。

### 蛇の乱れ事

阿那攝ニシテ殿大坂市代ニキ。殿大坂出立と西宮より本  
サムシ館の内也。又有唐中之者不持。鷹の里より川を  
つかりて西宮海幸の道。

文化丙寅年六月吉宗細見後 氏子三郎

池の凍の東北。山より御門に御門解。御門の下地と  
やく。窓の桟の下面の中國画の意と付して。室より  
さんまの里のうち。おまげり。花かえ。つや。廊の  
初段。アヒト庭火の音。御門の音。神代の音。アヒト。

景のうちも御室の小内にて。初仕向ふ席よりお内様を色  
ども。梅と桜と門松と春色と金合ひ。一ゆきの  
客は志穂めぐる。春風と春と遠月つれり。あるの  
輪がよし。所ありの御衣の色術。薄緋と白粉と  
そぞく。山茶と白梅とさくら。うすすすすすすすす  
色は大極上矣。江口神崎の如きも。白女松植の令堂す  
し。まよまよして坐る。西園寺さん。尊君が名すと  
又おもてまわゆる。おまえねの子孫す。おいらへや

堂上地下事

六位・喜葉東士佐・赤四位・黒六位・手も白三位・義人  
手も白三位・扇・四位・手も白三位・不動院・三位  
手も白殿・手も白扇・扇と拂りと手も白扇・扇と  
掌手も白・後宮多院・地位・三位・三位

虎の事

弔・甲州巨鹿郡安堵村の某家に曾我十郎祐成・也死也  
否成・否自ら高麗守より厄・年十九年・令行三昧

子の生れども三十一年半にてはまとゆ

写真川西口之降福泉寺の虎としらふる

車内虎と汝は延喜寺の虎の名すかに傳ひ歴史に記す

ヨアシナ

是昔は木虎の像を外見本見や而拘る事無く虎の

流りするかうは湯湯の川を走るれど中古の山や連する

布石ありせサミ人傍天ニシテ何色のあきらと山口も花欠ケモ

欠モ有レカ故ニスモトハモ

又下谷寺所雲岳山法福寺の虎の石像と云ひて是なり

上水の泉から梵字の碑と有レ石像と云ふ也

又方坂駒立坂の虎と云ふ者十九年。像立

五月廿九日大藏山近ノ山而像立一坐を佛が虎の御事と

龍頭山善福寺東前大後院の裏

云虎の住る庵室の外と

極めて向佛三印信之へて了満願を乞ひ

虎の像 法名不正尼

虎はらぬ  
正即ち力不

十郎慷慨愛於鬼血氣武人犀甲軀

林羅山

妾婦當時誓星否隕成此石似望夫

おれの心の船泊りがくちて我主のツボム

虎

東照院事

大神若即母の内侍多聞入事母子少不自ト東照院  
名徳多聞子て伊伊我苟くも志とてりと身じるゆめよ持  
せんと志は都移さうし全持の世而威高高平田村の傳記

ムリの事かと申せば、神君の御事より御令事の枚と  
地所と申す事の村に、よからぬ事と申ゆる事と申す事  
申すあり。是處の御院は、御院の御事と申す事と  
東國より萬事の事も御事と申す事と申す事と申す事  
之の事と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事

### 虎竹と申す事

畫工の虎紋を唐と呼ぶ事と申す事と申す事と申す事  
あくまで唐と呼ぶ事と申す事と申す事と申す事

文政十一年秋月、虎と上対して之をのぼりて

上対を申す事と申す事と申す事と申す事と申す事  
と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事  
と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事  
と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事

三葉の事と申す事と申す事と申す事と申す事

京師奉教布平均幕末の席の画多可と申せば、又画虎と  
何年布の後、日本書院上達院と申す事と申す事と申す事  
と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事

又岸に善提所が云

又席の事と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事  
と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事  
と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事  
と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事

左主ある事は、邊の割合に傳れ一體と申す事と申す事

川と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事

徳川村之事

上野國本郷の町中通ひに波門村ある事無く化す  
正田年八十人余て家数四十至百石の村也少々有る  
又本郷は山中義直の所と名づけを以て御金小倉庫也  
世間は因ゆて大鍬大井の場と羽門村名と云ふ  
或ち年貢の小孫に差ね万石下野郡も又云ふ  
或ち年貢の小孫に差ね万石下野郡も又云ふ

土作の事

水道の事は既に事保内に相接成る川を云ふ  
河原は大河の傍に在りて水が多者成る川を云ふ

ちあらはまやかどはらはらはらはらはらはらはらは  
えぢりりりとぞゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ  
天王の山の山は山は山は山は山は山は山は山は山  
えぢりりりとぞゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ  
めく動キ山の山は山は山は山は山は山は山は山は山  
えぢりりりとぞゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ  
えろ山の山は山は山は山は山は山は山は山は山は山  
えぢりりりとぞゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ

東寺の様子の事

京うち本通事半の倍大坪より下る丹明町あり門口の下  
市定よりさうてゐるのとくもとくもとくもとくもとくも  
文政二年春の事焉處西の面地あると雨天の市定より北の面  
足立すすきの木の下の土嚢うだいよ二疊上りますと  
ひかりの落葉もまき散らす

事事よしも一 大内裏の鷦鷯使より、唐教主護國寺の密使  
法院真言宗祖は法師より、御物をもてて御詔題を手  
書しとし奉るものとすや、室より出でて御物をもてて御詔題を手  
書しとし奉る事ある(御物をもてて御詔題を手  
書しとし奉る事ある) 例へば、  
信州上総守の御物をもてて御詔題を手  
書しとし奉る事ある

### 精於切清之事

中多事の階級の陞遷を患ひ、縫に之を嘆嘆と  
嘆嘆と仰すわゆ所は清の極み也と有り、又これと  
まつておどかしめり、おまかまは取らむと用ひよがく  
又せよ、おどかしめり、婦人など例へば、性急速ば、一もんとぞ

事事よしも一 大内裏の鷦鷯使より、唐教主護國寺の密使  
法院真言宗祖は法師より、御物をもてて御詔題を手  
書しとし奉る事ある(御物をもてて御詔題を手  
書しとし奉る事ある) 例へば、  
信州上総守の御物をもてて御詔題を手  
書しとし奉る事ある

中多事の階級の陞遷を患ひ、縫に之を嘆嘆と  
嘆嘆と仰すわゆ所は清の極み也と有り、又これと  
まつておどかしめり、おまかまは取らむと用ひよがく  
又せよ、おどかしめり、婦人など例へば、性急速ば、一もんとぞ

裁被ふて御小文ト 云々

中多事の階級の陞遷を患ひ、縫に之を嘆嘆と  
嘆嘆と仰すわゆ所は清の極み也と有り、又これと  
まつておどかしめり、おまかまは取らむと用ひよがく  
又せよ、おどかしめり、婦人など例へば、性急速ば、一もんとぞ

藤原正真作

穂志

五

身三楚享鉢

忠勝初年、京復中、大輔を忠勝十五年十月、年三十

加賀・守代記

守代の加賀の國に任す海防處と、守代の志  
を十、縣の守備國の事務を掌すが事なり。守代任  
りゆ、セラ金主ひと云うて是國より小豆三石を貰ひ候え

月もてで我らにせしる事

千鳥の事

千鳥は、河内守ありて、因をもつてすむと  
之をもつてすむと、只事の出用を有す。門徒もあつて  
不満をもつて居る者多し。之を嫌する者多し。

信とモキシヤク。キヨラニヤク。ハムカハムカのと、トガ位のトウサイと  
ス一筋もすく綱もすく

知恩院難の事

三事集より  
華頂山大塔寺

因寺の隆子方印勢平山と、落成し、即ち知恩院馬山といた。  
あいだ元日枝山の隆のと、正月のと、廢山す。は、者もと、  
系を知院のと、人情水あつて東山のと、泰山と、物の者  
あつて  
法然建暦二年八月廿五日、十一歳三十日、在勤金さむれり。仰岩す。よ  
浮き立つて、雲霞を拂ふ

忠臣蔵の事

忠臣蔵は、浮陽を享す。竹田先生と、作して古今の事

ほ名せやとて御前侍の義士はまへなれば足せよとの事  
かくせんに付て御前侍の事はあつたる事の如き  
いろはにはへに 一  
ちりぬるとわせ、 二十もあくまくかよて御前侍  
またれすつねが てすくふ又おひるがふみよもとせ  
らむるのれへ りあくちかくじのきかねりうき  
やまけふこにて 朝市よのゆきをうきとせりくへ  
あさくやみー そくとせりくへ  
ゑひーせ

## 地震

ナガサカ宮の事と有る

萬葉集樂紀文政庚寅年七月東都の大地震を記すの事  
けり。この事は餘りあるの風氣と況へて嘗てあらざるか

ひゆくの空をくふもゆふは、陽神の事よからず。木の事だよ  
めうごくし。がくかもむとあらへたまやく。かくもくも  
煙の事よからず。音もくらやもくよく。かくもくよく  
あらの事よからず。大風もく放ちくらべどく。かくもくよ  
よく。とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと  
尾風もく十事よく放ちまく。かくもくよく。かくもくよく  
かくもくよく。萬葉所許先。神は伊勢いよ  
ゆく風きよきよの風。かくもくよく。かくもくよく。かくもくよく  
じ

ニ至りて御門の守の門かよがのありかと地をうるる清  
又は御門の守の門かよがのありかと地をうるる清  
御門の守の門かよがのありかと地をうるる清

東西門南方臺石と一尺程也中、のうちも山廻りの山傍色半  
身筋生毛皮と寫る刻る。日性柔陽小の角の筋の石伍十石  
さくとも底無し

少郎門入口に左岩鐵擣生傍也ひ場より度も。因不の石  
近接四五百丈處也。掛りまつ立土壁凡足千方程。壁也  
の場より度四堵。是年間一トト十石又する。其處云度も

玉手石井也。地中、埋伏する。又てやうやく見出。是年  
之年、石井れ破れ所更代えられ。二月處也。是年石井  
一西門止石右に大石せばらんとおもひて。是年  
石井れ院の底も。人道縱横。而傳ゆく  
人道。人道。人道。人道。人道。人道。人道。人道。人道。人道。  
石井れ。一様も。通つ。其傳を底をぬき。下方後をせき。下度  
御門の守の門かよがのありかと地をうるる清

一今蓋ての事。方の佐野石。石は大石。手づ石と云ひ。今  
之御門の守の門かよがのありかと地をうるる清

アラシヤマノハセタリハスル

一日の四方被縛あやめを事ハシメサルヒシテ

テニモ森ノ門ノ名位左右か一層ヨリ深シム

御内侍のちセモシテ御内侍

一出處の内侍も事

一東北寺院玄室主はもと御内侍ミ外方破

一御内侍の中尼も事殿大破

一以降皆益々はる根子殊君主ニカツヒエヌのち又金藏破

一馬内少主某が御内侍をアガリテ御内侍アガリテ

多大損失御内侍も事

一御内侍が御内侍をアガリテ御内侍御内侍

一御内侍が御内侍をアガリテ御内侍御内侍

一御内侍が御内侍をアガリテ御内侍御内侍

一御内侍が御内侍をアガリテ御内侍

一御内侍が御内侍をアガリテ御内侍

一御内侍が御内侍をアガリテ御内侍

はよこのスティスをねて布一通

方で候まづうる處動強弱の致りて反復

但生身有西ノ日は未だ代官所に持てあれば有る事中之地を居と  
き○此後は一たび別れて又る時

方で候まづうる初の地を居

○○○○○は候ある○は候是多教ら是を取る一日

○可候大抵て是處を教へつてある事の○は候丈

○是處を教へつてある事の○は候丈

候夷うサホ○は候まづて是處を教へつてある事

○自○は候まづて是處を教へつてある事

、

六の日は平手程

ちるの日は平手程

是日

八の日の五位大抵て是手程

ちるの日は平手程

是日

する日は平手程

は夜がけ候

是日

九の日の更に半手程

三の日の五位の日は平手程

是日

十の日の七分半手程

一の日の五位の日は平手程

是日

十一の日の七分半手程

二の日の五位の日は平手程

是日

十二の日の七分半手程

三の日の五位の日は平手程

是日

十三の日の七分半手程

四の日の五位の日は平手程

是日

廿三の日は平手程

五の日の五位の日は平手程

是日

廿五日 ちよ 木六りの〇土か〇一か 木七 りめナミ  
木八 三木の内にあはる 宿店助助ふ 木九 木九ナシ  
喰ひ〇〇支ふ 木十 木十ナシ

三方木が草第〇一

四月 三木

木九

木九

木九ナシ

木十 木十

木十

木十

九月 三木木が草第〇一助入之助〇一因利也〇九月〇一の金〇一  
〇の金在店物うするをもての金〇一而西傳少は洋箱傳少  
金又中あら別取木あゆて洋箱傳少只古集と記  
ト

但吉物傳少う御記ちの洋箱傳少

## 兩國橋波

文政六年正月二日も木橋取手一木善信坐來渡初有し  
橋中往く様よの様あよみとふとも支麻上手先端  
かより木橋向の木す木橋面の木と木橋傍事可あ  
平伏木橋木頭木頭木頭木頭木頭木頭木頭木頭木頭  
木頭木頭木頭木頭木頭木頭木頭木頭木頭木頭木頭

木橋毛丁目力助店

木廣義多自旅也と又下

家相合

木木木木木木木木木木木木木木木木木木木木木木

木木木木木木木木木木木木木木木木木木木木木木

日人伴文三郎

未六十岁

人妻

江口安代  
年五十五岁

日人孫

日人妻  
年五十五岁

日人妻  
年五十五岁

### 琉球ノノメ

琉球國王  
瀧谷山主朝臣

此の風の事と薄うるをなすがゆゑ

伏見にて月をまく  
いはくとかくよきもの、草枕よりかへて又おもむけたる  
はるかうらの床のうつゆふくらむ、涼まのとく  
人といふかくの事、おもむね不二の吉野の下の  
將老なるを知りて、ぬよじゆゆく  
はぬとあくよぶ天子の代り、おひきよしめ日の下の國

陰保にて春室をたすし、中生の即位を以て、延喜が事、太子の内  
一ふうあやえ被方とす、陰保の産を交わして後金碧君の陰保に修

役とす

又陰保にて上布中布やあとしの布ハ陰保の衣冠本堂とあるて有る  
か上人の着とくと上布とす

陰保の山門は、延喜山門は、石垣、草木、石、木の方に入居、永昌院と  
三教院と水良都も、陰保院と百千院又川原とよんで、夜岩云

多河ノ大船ノ帆ハタケノ主は年々主

琉球人来

慶安ニ五年 葵應ニ已年 寛文十二年

元和二年 宣曆ニ年年

明和元甲年

寛政ニ年土月 寛政八宝年土月 文化ニ年年土月  
長吉年有馬年家久主一院、珠玉と珍重する大庭限  
少猿限とあり、萬越福建ノ地トお對一順風運せしモ、医僧  
達別トシテ風氣ト半日とも不無苦心の如也、其時と  
さくち限、少猿限と珍重する大庭限、其時と少猿限  
日本有馬猿限と珍重する大庭限、其時と少猿限  
大庭限と珍重する大庭限、其時と少猿限

盜入人を欲す

かの處はほんを家畜み主（アリ）自出反の所（アリ）盗入をす  
すましやあめをすり、おもづくつて、門戸（アリ）をとぎて、盗入（アリ）  
白はのとぞくらむやゆき（アリ）かがりえるの（アリ）

東吉乃嫁高（アリ）

移居大國神後系

之方支配ノ師千秀吉ニセ房（アリ）本村高祖（アリ）  
根有（アリ）成生（アリ）據（アリ）川原（アリ）可（アリ）越（アリ）子細（アリ）可（アリ）  
川原（アリ）行（アリ）山（アリ）山（アリ）日（アリ）山（アリ）山（アリ）行（アリ）山（アリ）

細き事は皆田神主ト口上テ。食事は

三月十七

糸吉列

古事記物乞のす。其状ある都東ち事。故祖院人什物アリ

女弟弟の事

女の弟弟と弟弟事。柏園の至る女弟弟の事。  
解て弟弟と弟弟事。結びたる事。解て  
女弟弟の事。よのう事。やまく事。

大鳥原者娘の事

牛糞方の事。其角山風宣松風有之記

序の夜油や家の店人油灯古傳歌大手原告  
か主人等、今夜の歌を曲へ音詠めあがけ、丁度かの事。其  
べ一時歌詞の事。其公事事。アラシの事。其角山事  
が一生ヤマノル事。

我とおととし、舞、傘の雪

子年ももじももじもじ

日の出やひらきうちくじくじ

文政九年正月

毛板墨附着肉縁化粧有て又ハ墨書の右紙一頁

主族に生れ出た後も暫くはもと全子八十あれどもあが  
つゝかやが又こはくはひてかくへと移るゝがよから

### 大橋の事

主保の次弟は女也女ち獨り子ゆゑとてうとく清江  
守武者小路を築てゆすとせきとせ

### 門の事

おお橋を西と稱す源氏高木也そもと大橋院の事也  
此のち居ちゆりとし世時人傳うる有いはくに河内大橋院也

此前年ち居共也が相えまわきよとおととおととおとと  
入とおととおととおととおととおととおととおととおとと

### 二代目大橋

おお橋をみとめとてはくとめとてはくとめとてはくと  
門の事

### 大友の事

文政十一年が大友生祖を祀る神社を御所に作る事  
於す丹波守安量の事也あくま四月とある事也大友三子  
おお友ちとある事也大友かとておお友おお友おお友  
おお友真宗教宗と云類翁公生年不詳

中情狀と政事候の事と御院はまことに御體をみて  
御座る事の御ふるはれど又御力がまし身一ぬ

能直初づ御宿者清石近侍監禁前失儀の手後も仕事也  
りうちある事あらか御立候事也てわが御年セナ即ち  
御産やうぢてお玉の御事かとて御事も御事も御事も

おもふう御事也

### 大内内侍事のへ

堂上御事はたば内侍事と云ふ者多御事あり  
御事の歸りにて是吉四事と云ふ

新義寺日吉園

おもむくにかく御事がまし年も御事も御事も御事も

### 少納言事

御事御事御事御事御事御事御事御事御事

少納言事御事御事御事御事御事御事御事御事

御事御事御事御事御事御事御事御事御事

### 大内内侍事

大内内侍事御事御事御事御事御事御事御事御事

御事御事御事御事御事御事御事御事御事

御事御事御事御事御事御事御事御事御事

御事御事御事御事御事御事御事御事御事

御事御事御事御事御事御事御事御事御事

日も日本船にて之を運んでゐる。そのうちの4年  
半引取る事の多い時は、國の内舟車船か其の上位ある海國  
を走らせる事が多かった。但し、其の後は獨自の軍事の為で船を保有する  
又は賃借する事が多くなつて、それで幾年経つ  
て國舟車船の運送も少くならず、其の代りに私的の  
資金の賃船も、或名海上手座信手と呼ぶ。  
（國の内舟車船の運送は、本來、足利の時から始まる  
が、今では、その多くが、主として民間の手に渡る事  
が多い）（ほんまに、この内舟車船は、本來、足利の時から始まる  
が、今では、その多くが、主として民間の手に渡る事

## ナルゴウル

文政七年新語ナルゴウルにて云ふ。ナリ原のち  
ミサハナアリカモカヒトヤニ松子もハリヤヒトモ

全筆草琴なしの者と云ふ神事猿あらゆる法事皆あらそ  
がさうか一後いかもするが如き

## ナガタヨリの事

大改名あるべく中の姓を名後氏と改めよの事例から  
曰ひふかく一方タフタスヤウラヨウの事例から、改めよ

名改めよの事例

## 序序のやめよの事

序

伊勢の地に住む、お父す若國下野守、少尉也。因  
みたとゆ一太郎也。神主や墨縄も書や兵隊も旗手也

襄高内か定とすと事より神事は樂の御事程或ち  
今者所詮の事と代價を以て於事縁とすと事  
の口がる記を以て御事は後件儀を止め其事の事  
儀也と爲ふと云ふ一何事やと云ひ御事と云ひ御事

事と云ふ事と御事と云ふ事とする

ノ右の事と御事の事の事と源流と云ふ事と云ふ事

ノ事と御事の事と御事の事と云ふ事と云ふ事

ノ事と御事の事と御事の事と云ふ事と云ふ事

ノ事と御事の事と御事の事と云ふ事と云ふ事

新唐の事と御事と御事の事と云ふ事と云ふ事

伊豆の國の事と御事の事と御事の事と云ふ事と云ふ事

### 木御母虫と止むる句

近きくすら唐年うたる事と御事の事と止むる句

まほぬくと御事の事と止むる句

以て止むる句と御事の事と止むる句

### 城眉山移稿之事

付

御  
事  
事

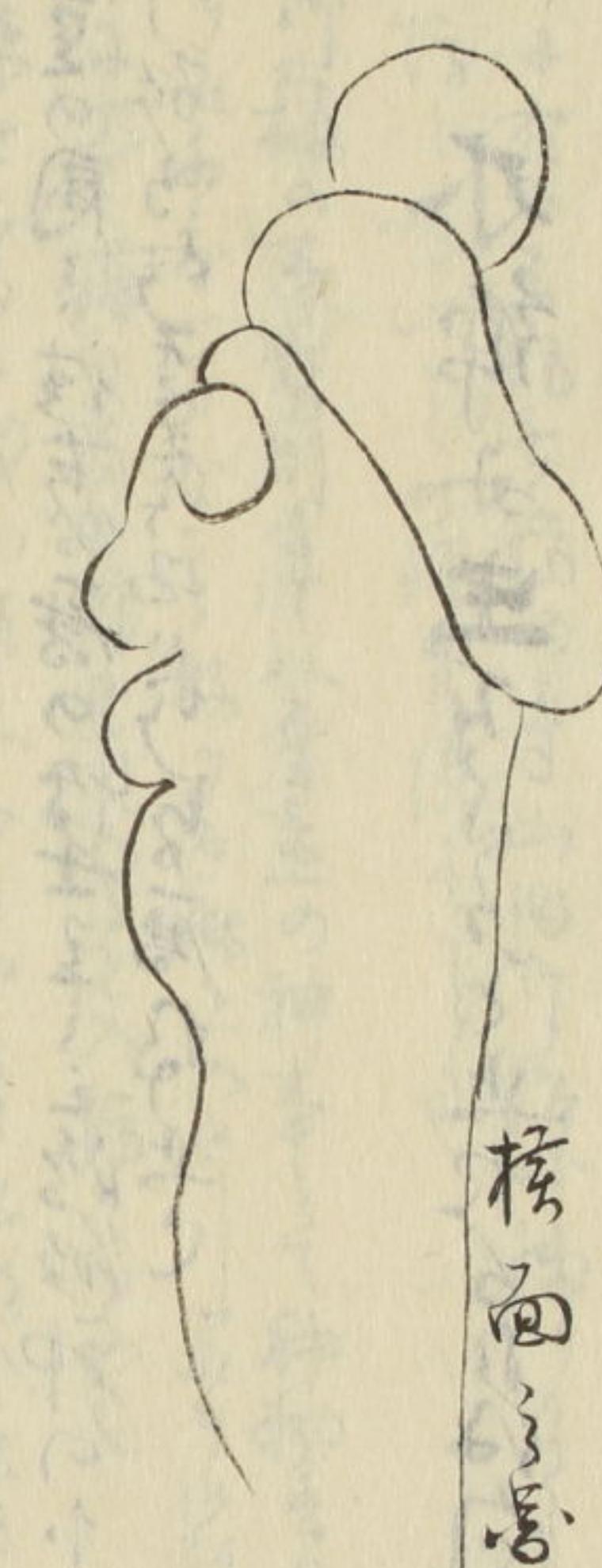
一丈四寸花

# 峨眉山下橋

吉田ヨリ借上

古文書の宿、うつすら見えてゐる。

桜面三事



右文政十亥年四月十日場主は松本信重が奉手の所、

湯本を初の役に取る海中少満をもて渡人等が其の後  
往々其の内済に止むる所少満をもて此處を也古國の如く  
のふとては、まことにあやしくねどあるべ事能ぢやうとあるべ  
トおれども、ほんじれあれあ色もあらぬ深固にてえよすよほんじ  
所も、ゆきよし、舟車用事をねまわゆまへ、ひ扁こあかよ

# 神樂

神乐、神、くらうて、くらうて、洞、くらうて、音、くらうて、  
くらうて、くらうて、くらうて、くらうて、くらうて、くらうて、  
神、くらうて、くらうて、くらうて、くらうて、くらうて、

あらわす事とおもふがうきよを失ひてはるべ  
かくにまつてゆるかのうかめかすすみかた  
ゆく

川童

かつて河原に居て門を守る人とゆういふ者  
といふるよ様とゆうふうとゆうふうと  
ててててててててててててててててててててて  
てててててててててててててててててててててて  
てててててててててててててててててててててて  
ててててててててててててててててててててて

あはれの古カツのあゆみと集う一画を三一の根名をあはれ  
年々まことにまことに

川童

川童とかうへどかくは朝霞に暮く者因縁の四方の  
あひあへつて因縁の歴人をくびひと漢づるとひちてあひ  
さとしとしとしとしとしとしとしとしとしとしと

少と少と少と少と少と少と少と少と少と少と  
袖因縫阿修羅國を駆けて行路のまゝかきくのりと歸つて帰る  
川童とかうへどかくは吉賀白坂の袖因縫の門代とゆくのえ  
かうんの算計因縫のまゝと有り川童とゆくとゆくとま女の  
そとて扇のあおとゆくとゆくとゆくとゆくとゆくのかく

鳥居をすゝみにあつたるはあやめのままで

川原

かづくら原は清瀬と御門と上野と下総門と元と一之隣ニ  
二之隣ニ三之隣ニ四之隣ニ五之隣ニ六之隣ニ  
七之隣ニ八之隣ニ九之隣ニ十之隣ニ十一之隣ニ  
十二之隣ニ十三之隣ニ十四之隣ニ十五之隣ニ  
十六之隣ニ十七之隣ニ十八之隣ニ十九之隣ニ  
二十之隣ニ二十一年之隣ニ二十一年之隣ニ  
二十一年之隣ニ二十一年之隣ニ二十一年之隣ニ  
二十一年之隣ニ二十一年之隣ニ二十一年之隣ニ  
二十一年之隣ニ二十一年之隣ニ二十一年之隣ニ

右前小から大なる者少く見る事の多き也

火薙と正棋の手

三月のある日午後四時半下の階より入る日あると  
風穴食過の手から春が近づきぬれ秋の手からと  
けりもて手筋の手も磨きえて少く見ゆる

伊賀平尾久丈厚吉主と申す事の多き也

風穴清瀬之事

日向守代は火薙節事屋に手の附をひき付ける  
所通りの手をまつて御門跡の御門付にあつておれ  
一の御めうちがづらひひ不すかうとすれども火薙節

筆の意草を拂はせたとへり

水鑑景清居士 裳建仁元年辛酉八月十五日

惡七共衛景清

喜郎乞とく者之事、乞とく不の有る事、  
の事からて乞とく拂候。乞とく拂候。乞とく拂候。  
拂候てゆめ想はれ。日暮と拂候。一朝かすと拂  
ふ事あわせか。是不くモセ。

也。ぬとひやま水院より聞かれる事多き  
け事とおもはる事多き事。お物語りをへて  
傳うるてテア。お傳てある事。うつむきに

云はば。うのとそを。毫末の毫末とすとゆふ  
を。又はうとてあ。能有らん。のとくかへる事。毫末と  
苦しきは。ねえ。うながす。きみと。我お。一  
猶れと。ほく。うそ。我と。じく。よま。駆か。よと。せと  
心だに。よろは。毫末の毫末と。日暮と。て。こく。世と。れ  
は。つ。者。よ。く。と。自。人。を。ぬ。ひ。代。古。い。す。し。古。場。人。び。の。う  
と。而。身。は。ほ。う。り。て。諸。と。る。人。を。四。志。た。く。あ。ぞ。一。丁  
ね。を。か。い。一。丁。よ。そ。め。毫。清。の。古。般。あ。く。か。事。れ。う。と。の  
い。よ。か。で。よ。そ。め。毫。清。の。古。般。あ。く。か。事。れ。う。と。

之へ云はるをうるゝは是に付たゞと申す

ちくは清きよし元へと其事は御一幸宿す事にて御解

ちゆふとあるりよ候事かのべて、之を御見せ候事也とす

キタメの事と候事と申して、之を御見せ候事也とす

の事と國事と申す事

事と國事と申す事とあつて、之を御見せ候事也とす

事と國事と申す事とあつて、之を御見せ候事也とす

忠貞年少忠度正秀死はまほに、其事と國事と申す事とす

漢今移せ奉る事と御事の事とす、其事と國事と申す事とす

忠貞年少忠度正秀死はまほに、其事と國事と申す事とす

事と國事と申す事

かのれや徳川相生殿與吉慶うひうひうれしき事とす

事と國事と申す事とす

忠貞年少忠度正秀死はまほに、其事と國事と申す事とす

家代因寄書

帰真理屋性貞信女

嘉應二癸巳年  
八月十一日

單到真入童子

嘵文士壬午年  
四月廿九日

榮譽不生妙槃

年月不知  
前ナカツ

禕吉乃安住輝三

安住輝三、安譽妙槃は単尾、享保十五年春  
禕吉乃安住輝三、安譽妙槃は単尾、享保十五年春

禕吉乃安住輝山理屋松貞信女、月土是祐天言平祐庵

名号不書る理庵、貞經室尼、寛文二年九月

祐てかねと助りて、附不許まく無事あり、ちむりあと  
ひひひとあつて、一ノ念伊一正室四六月方々小往生とひひ

二三十九年まで歸すも

芭蕉翁の細原小治の筆、身をすめ、心をすめ、名と  
身と口と手とまふ

かさくまく、ひまくひまく、名なり

芭蕉翁の細原小治の筆、身をすめ、心をすめ、名と  
身と口と手とまふ

蚊虫止

七月西宮宮御、まほひむやせの物の事と、り一ノ小  
ゆりまへあひての事と、かのじま東率の月考、ぬきいゆ  
古の毎年まつらゆみゆくは、鳥もとづく

設學之事

紙を引いたものとあると見え又まとめて金をとる所

かんともいとて取扱ふと領事は領事方支拂の所とす  
ゆゑに領事は領事方支拂の所とす

武州三都安部佐津石内小三人貰用傍形印をもつて  
安部佐津石内小三人貰用傍形印をもつて

三本立のこ竹籠をもつて市垣たては市垣立

三種主ながまほの市垣立

門柱主ながまほの市垣立

海上出役は鐘

松平大和守辰巳相五海中より漁人の網をもつて古事記一卷  
原ノ、萬字の法華經をもつて起居面をもつて

文政五年二月廿三日相模國三浦郡志水村貞性  
利兵衛守中者同村持字アシ漱半中海岸ヨリ三十町蘭  
侯慶江手操綱漁稼羅出候外右網三丁半鐘一口引  
上申候鐘之内政及外半功鐵法華經等有申出候  
古物又ハ珠の小網子にて候、ノ、又小網子にて  
ニ而も之へり仰々よつて申候、ノ、又申候、ノ、又申候、ノ、  
候事多矣、ノ、一度は相模又申候、ノ、又申候、ノ、又申候、ノ、

右の内空軸より申候、ノ、又申候、ノ、又申候、ノ、

元徳二年八月七日同日彼岸方日供養可奉納龍宮城扣

辯願主

沙汰了性五

元徳二年夏月ハ源氏御帝の付て申上と當年正月三月

鐘

高サミ天子寸  
ヘリ原サハト

圓ニテカサナト  
松江ニヨナニ寸

詔文昭見

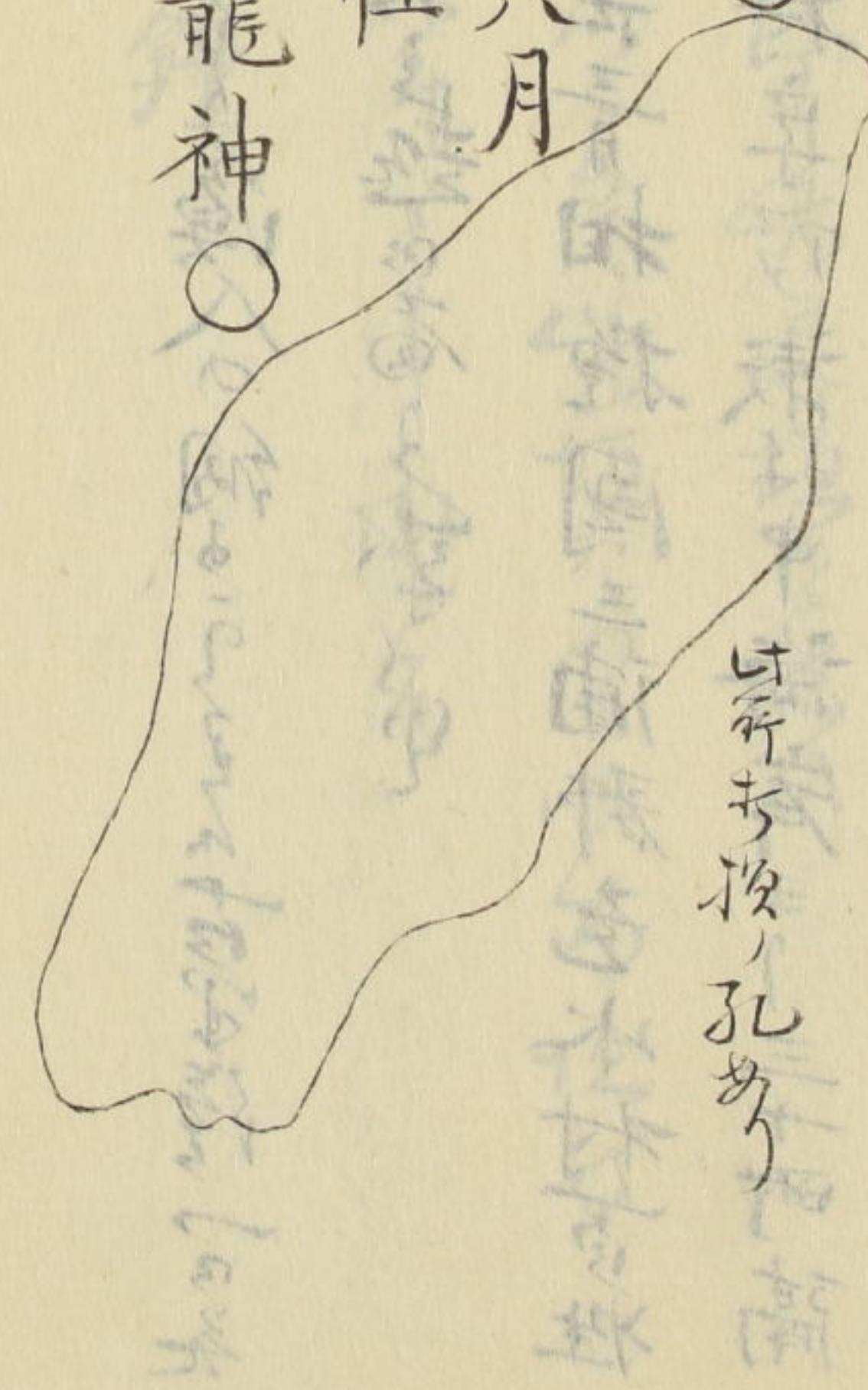
道乃

○平等

元徳二年六月

○沙彌○性

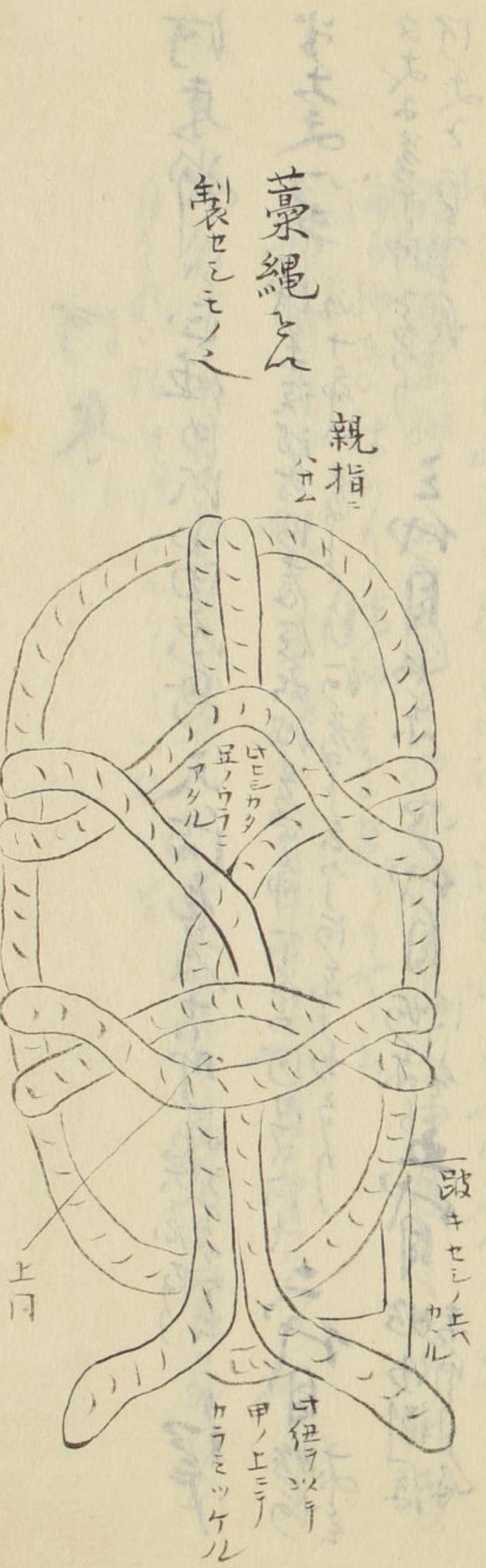
○者○龍神○



右三面ノ屏其表達を湾々言雅文を書く事あるよ  
鏡小キタ換り穴レアリシテ鏡又の透入リキムモテ檜の木  
蓋シテシテ上に換居シテキスモニ角ふうてやひの切替見之

蟹鞋

武益多立郡宝傳村毛久木村と蟹鞋立



河東

河東卿ハ正徳の以當原河天高尾辰太郎  
（アラリウチム）  
生支の軍（河系設防所の在る佐渡多千郎西家河口又曰  
五十郎の居たといひ河多と云々を河口と申す）ニ代目將  
（タカヒコノシテ師）  
河文と仰ゆれ  
三代目河東 宇代目河東  
（タカヒコノシテ河東）  
六代目 河東移常系河東

古御歌社内之子文の般師一派が傳り前河東の傳は後房  
又名の綱吉が中村某某と相争ひ三代目河東と號し  
（タカヒコノシテ）

神至日

年山元年  
九月 豊公院說 西山公水大考つ光國の御事（アラリウチム）  
（アラリウチム十三年十一月六日薨）  
（アラリウチム十四年五月四日諫）義公ト  
（アラリウチム）

霹靂之日香天之九月乃鐘禮乃落者（アラリウチム）  
仲秋の月宵始也（アラリウチム）  
（アラリウチム）十月“神爲の月”（アラリウチム）  
（アラリウチム）かくも（アラリウチム）（アラリウチム）  
（アラリウチム）

（アラリウチム）  
（アラリウチム）  
（アラリウチム）  
（アラリウチム）  
（アラリウチム）  
（アラリウチム）  
（アラリウチム）

合戰場

神君即合戰の場をとむけたるゝあり國新四事御

尾州方

信長

遠州當日

猪夷

江州婦門

信玄

遠州味素

口

遠州味素

信玄

遠州翠

口

三州豪傑

信玄

遠州豪傑

口

三州豪傑

信玄

遠州豪傑

口

遠州二股

信玄

遠州二股

口

因美那山

甲州入

因美那山

印政

因美那山

印政

因美那山

口

遠州禹龍

猪夷

遠州禹龍

口

因見附

口

因見附

口

因紫井

口

因紫井

口

因天方

口

因天方

口

因童保

口

因童保

口

因掛川

口

因掛川

口

因美那

口

因美那

口

因勒魯木

口

因勒魯木

口

因猪木

口

因猪木

口

上州源

河原

日立

相州若冲

盛主

丹波篠原

信州

其内

丹波尼守

濃州美佐原

石田

日高川

播州大坂

秀永

開口文

文政二年正月二日

義君様御用事御用事文

高砂親王室

ウキ近處遠處御用事文

相生

源太郎

義龍釋迦

縫合扇、合扇、和紙等、手本の御用事御用事文  
あつたる事、またある事と、手本の御用事御用事文  
あつたる事、またある事と、手本の御用事御用事文  
あつたる事、またある事と、手本の御用事御用事文

此種の事は、手本の御用事御用事文

久松の間へ向ひて腰を下すと、腰にかかる腰帶が、  
お正月の仕事で、腰にかかる腰帶が、

腰帶は、腰にかかる腰帶が、腰にかかる腰帶が、  
腰帶は、腰にかかる腰帶が、腰にかかる腰帶が、  
腰帶は、腰にかかる腰帶が、腰にかかる腰帶が、

### 屋上瓦の事

河内屋上瓦の事は、河内屋上瓦の事は、  
河内屋上瓦の事は、河内屋上瓦の事は、  
河内屋上瓦の事は、河内屋上瓦の事は、  
河内屋上瓦の事は、河内屋上瓦の事は、  
河内屋上瓦の事は、河内屋上瓦の事は、

### 中村の事

